ナバリノ魅力 Labo 1

ブンカザイが息づくまち

名張市街地の多様な魅力を再発見する「なばり まちなか大学」。その第１回目となる講演会「暮らしの中の文化財～価値の創造と継承～」を、３月４日、総合福祉センターふれあいで開催し、約60人が参加。奈良大学の大河内智之准教授（写真右）と近大高専の田中和幸准教授（写真中央）による講演と市長を交えたパネルディスカッションで、身近な文化財を守り、引き継いでいく必要性を訴えた。

問 文化生涯学習室　☎ 63 - 7892

貴重な初瀬街道沿いの町家

「東町から新町あたりの初瀬（はせ）街道沿いにあるおよそ400軒のうち、200軒程度は、昭和20年以前に存在していたであろう歴史的な価値がある貴重な建物だと感じます」。そう話すのは、近畿大学工業高等専門学校の田中和幸准教授（建築史）。名張市街地の町家の調査・研究や、名張藤堂家邸跡の活用促進を目指す名張市との共同研究に携わっていただいている。

この一環として、３月４日、総合福祉センターふれあいで、なばり まちなか大学「暮らしのなかの文化財～価値の創造と継承～」と題した講演会が開催された。

田中准教授は、講演の中で、令和２年に新町の町家を学生とともに調査した事例を紹介。調査では、幕末の地震の痕跡を発見し、建物の歴史的価値を見出した。「名張の市街地にある古い町家や水路などについての記録がほとんど残されていません。実際に建物に入って、床下に潜って、ようやくいろんな特徴が分かってくる。調査を進めることで、名張の魅力を再発見し、後世に残していくことができるのでは」と期待を込める。

文化財を守る仕組み

講演会では、奈良大学の大河内智之准教授（日本美術史）も登壇。和歌山県内で多発していた仏像の盗難事件をきっかけに、身近な文化財である仏像を守る仕組みをつくった人物だ。和歌山県立博物館の学芸員だった頃、３Dプリンターによる精巧な複製を寺社に置き、本物を博物館で守る活動を始めた。複製は授業の一環で工業高校の学生と大学生がつくった。

大河内准教授は「信仰の対象が複製でいいのかと声が上がることが想定されましたが、地域住民の皆さんからは『お身代わり』として受け入れられ、『夜も安心して寝られる』と感激いただくことも。複製を制作した学生も苦労が報われたようでした」と振り返る。

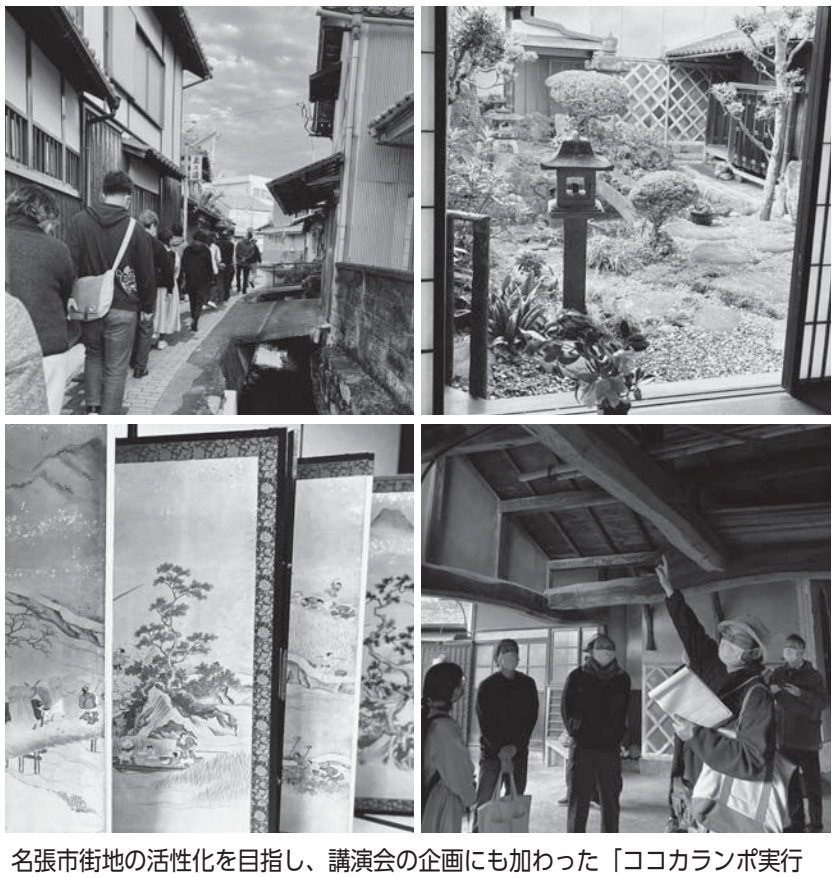
被害に遭（あ）った多くの場所は、地域住民によって管理される無人の寺（堂）や神社（小祠（しょうし））。基礎調査されていない仏像がほとんどで、何体無くなったのか分からない。取り戻せても、どの仏像か分からないという状況だったという。

大河内さんは指摘する。「私たちの過去は、証拠に基づいて示すことができない限り、再び描き出すことはできません。文化財は、人々が生きた証。私たちの「ルーツ」であり、「アイデンティティ」でもあります。文化財を守るために大切なことは、身近に残されてきた文化財の魅力に気付き、関心を持つこと。そして、それらを残そうとしている人々を応援することも、文化財保護を後押しします。過疎化・高齢化の中で、『お身代わり仏像』のように、行政や学校、市民相互のサポートが重要となってきているのです」。

名張は宝の山

講演後のパネルディスカッションには市長が参加。大河内准教授が、「これだけの古い建物が状態良く残されているのは驚き。所有者にとって管理は大変でしょうが、まち全体で歴史的景観が維持されていると感じます。ただ、史料が少なく、どういった文化財群なのかをデータで提示できないのがもったいない。記録の痕跡を探し出し、古い町並みが残る観光地によくあるようなマップに落とし込むといいのでは。地元の学校に建築史の先生と学生がいて、調査できる環境があるのはすごい強み」と指摘。田中准教授は「調査には家主の協力が不可欠。地域や行政につながりをつくってもらえれば」と訴えた。これに対して、北川市長は「エリアを決めて徐々にでもマップ作りをしていくことが、古い町並みを残していく第一歩になると思います。名張は宝物だらけのまちですが、守って残していくことはそう簡単なことではありません。だからこそ、その魅力をみんなで共有し、輪を広げながら進めていきたい」と結んだ。

未指定を含む文化財をまちづくりに生かしながら、地域社会総がかりで継承に取り組んでいくことを目指し、平成31年、文化財保護法が改正された。今を生きる私たちは、残された宝の山を磨き、守っていく物語の主人公なのだ。



名張市街地の活性化を目指し、講演会の企画にも加わった「ココカランポ実行委員会」は、昨年11月に乱歩の朗読劇に合わせて町家を巡るツアーを開催。市内外から集まった参加者から趣のある屏風絵や中庭に歓声があがった。